

第3章 「屋根裏の散歩者」論

第1節 「屋根裏の散歩者」の構造分析 —倒叙法としての「屋根裏の散歩者」—

はじめに

乱歩の作品の中で一番よく知られている探偵役は明智小五郎であり、「屋根裏の散歩者」もその名探偵が登場する作品の一つである。「屋根裏の散歩者」は大正14(1925)年に『新青年』に発表された作品であり、全篇は「倒叙探偵小説」(Inverted Detective Story)という手法を取り、犯罪者の心理と動機を中心に描いている。「倒叙探偵小説」は乱歩自身の分類によると、「探偵小説」の三形式の第三形式に当たる¹。そして乱歩の解説によると、「倒叙探偵小説」とは「最初から犯罪者を出し、犯罪者の側から描く「探偵小説」、但し犯罪小説と同義ではない²」作品である。「倒叙探偵小説」に関する乱歩自身の詳細な定義については後述する。

「屋根裏の散歩者」は犯人郷田三郎の異常な性格の描写と、彼が明智小五郎と友人になった場面から物語が始まる。郷田三郎はある日、自分の部屋の押入れの天井板が外れ、屋根裏に上がれることに気づいた。その後、郷田は屋根裏を散歩して、他人の部屋を覗くという異常な行為に耽るようになった。さらに郷田はさらに天井の節穴から毒薬を垂らして殺人したいという衝動にかられ、それを実行したのである。しかし最後に、明智は突然に登場し、彼の犯行をすべてあばいたのである。

以上の概要を見ると、「屋根裏の散歩者」は犯人の郷田三郎に対する描写から始まり、つまり最初から犯人は明されている。そして最初から犯人の身分やトリック、動機など読者に提示するという描き方は、読者から謎解きをする面白さを奪うことになりかねないので、謎解きの過程を楽しみたい読者は、途中の段階で作品を読み進めることをあきらめてしまうかもしれない。しかしなぜ乱歩はあえてこのような描き方を選んだのだろうか。またこの作品は読者にかなり評価され、乱歩自身も「(「屋根裏の散歩者」は)初期の短篇に属するもの

¹ 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第26巻 幻影城』、光文社、2003年、p.36。

² 注1前掲書参照、p.39。

で、「人間椅子」などと共に、奇抜な着想で好評を博した作品³」と述べる通り、本作品は乱歩初期の代表作の一つとして知られている。

最初から犯人の身分など明かすような推理小説は、乱歩の言う「倒叙探偵小説」に属するが、「倒叙探偵小説」の構造は一般の推理小説とどう異なるのか、また本作品の語りはどのような特色を有しているのか。この一節では「倒叙探偵小説」の定義を整理し、「屋根裏の散歩者」の構造を分析することで乱歩の「探偵小説」の類型に対する考え方の一端を究明したい。

1. 「倒叙探偵小説」の定義

前田彰一は『欧米探偵小説のナラトロジー ジャンルの成立と語りの構造』で「倒叙探偵小説」について触れ、その創始作品が1910年に公開されたR・オースティン・フリーマン(Richard Austin Freeman)の「オスカー・ブロズキー事件」(*The Case of Oscar Brodski*)であるとする。また、乱歩はこの倒叙形式の可能性をさらに深化・拡大させ、新しい分野として開拓した作品が、フランシス・アイルズ(Francis Iles)が1931年に発表した作品「殺意」(*Malice Aforethought*)であるとする⁴。乱歩が「倒叙探偵小説」の定義を論じる際にもこの作品を例として挙げ、さらに彼は「探偵小説」評論集『幻影城』で、「倒叙探偵小説」について次のように述べている。

フランシス・アイルズの「殺意」*Malice Aforethought*などは、殺人の心理を正面から描いている点で普通小説に近いけれども、犯人の計画にトリックがあり、その周到な計画が探偵の推理によつて徐々にくずれて行く所に作品の重点が置かれている意味で、次の類別の項に記す「倒叙探偵小説」に属するものと考えてよいのである⁵。

乱歩はアイルズの「殺意」を高く評価し、そして以上の引用が示すように「倒叙探偵小説」と普通の小説との違いを説明している。つまり、犯人の心理描写、周到な犯罪計画、そして推理過程の詳細な描写が「倒叙探偵小説」の中心なのである。

³ 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第1巻 屋根裏の散歩者』、光文社、2004年、p.552。

⁴ 前田彰一『欧米探偵小説のナラトロジー ジャンルの成立と語りの構造』、彩流社、2008年、pp.123-130。

⁵ 注1 前掲書参照、p.25。

また、乱歩は続いて「倒叙探偵小説」と一般の「犯罪小説」との区別について次のように述べている。

両者とも、純探偵小説のように犯人を隠さないで、小説の初めから犯罪者の心理を描いて行く点では一致しているが、倒叙探偵小説となると、そこに作為が加わって来る。犯人は単に激情のために罪を犯すだけではなくて、その犯罪が容易に発覚しないような欺瞞を案出しなければならない。そして小説の後半に於て探偵の側がそのトリック発見に、機智と推理を充分働かさなければならない。ここに探偵小説本来の興味が加わり、単なる犯罪小説と区別されるのである⁶。

以上の引用において、「倒叙探偵小説」の定義がかなりはっきりなされている。つまり正面から犯人の心理や犯罪動機を詳しく描く点において両者は同じであるが、犯人のトリックの描写、そして探偵の機智によって徐々にそのトリックが解明されていく過程が「倒叙探偵小説」の特徴なのである。「屋根裏の散歩者」はまさに典型的な「倒叙探偵小説」であり、その大まかな内容を見るとまず最初は犯人郷田三郎の人物紹介から始まり、続けてその犯罪動機や犯罪トリックが詳しく描かれている。最後は探偵明智小五郎が登場し、郷田の犯行をあばく。このような構成を見れば、「屋根裏の散歩者」は乱歩自身が定義する「倒叙探偵小説」の要素にあてはまる作品であると断定してよかろう。

乱歩は「倒叙探偵小説」の代表作である「殺意」について、「この小説は普通小説とも云えないことはないが、併し同時にまた探偵小説心を可なり満足させる名作⁷」とし、「やはりアイルズの「殺意」が最も面白い。筋のきめがこまかく、探偵小説的な興味も充分あり、少し過剰なほど作者の情熱が感じられ、犯人の恐怖心理も申分なく出ている⁸」と感想を述べている。乱歩の好意的評価から彼がこの倒叙形式の「探偵小説」をかなり気に入り、そのために「倒叙探偵小説」の執筆には意欲的であることがわかる。

それでは、乱歩自身が描いた「倒叙探偵小説」としての「屋根裏の散歩者」はどのようにプロットを配列し、また語り手と焦点化の転換を使って、読者の心を惹きつけているのか。次の一節ではストーリーとプロット、そして語り手

⁶ 注1 前掲書参照、p.41。

⁷ 注1 前掲書参照、p.47。

⁸ 注1 前掲書参照、pp.70-71。

と焦点化の分析を通して、上記の問題点を明らかにしたい。

2. ストーリーとプロットの分析

「探偵小説」は普通、犯人の身分や、犯罪手法などについての描写を物語の最後に置き、その後、真相を明かす。そうすると、物語のプロットとストーリーの順は必然的に異なってくる。例えば、本論第2章第1節「人間椅子」の構造分析—作中作としての「人間椅子」で論じた「人間椅子」のストーリーとプロットの配列がそうである。まず外枠の部分であるが、ストーリー最初の部分（ア）が、プロット最後の部分【E】に当たる。この配置は読者に不安を煽り立て、未知に対する恐怖心を増長させるためである。このような構成は一般の「探偵小説」がよく取る描写法と言えよう。

しかし、「倒叙探偵小説」は犯罪者の側の心理から書くものなので、犯人の身分や動機、犯罪過程の描写など、プロットの配列はほとんどストーリーの順に即して書かれている。つまり読者は作品を読み進めていくと、探偵役よりも早く事件の真実を知ることになる。それでは「倒叙探偵小説」は普通の犯罪小説とあまり変わらず、探偵役の存在は必ずしも必要ではないと考える人もいるかもしれない。この点について前田彰一は『欧米探偵小説のナラトロジー ジャンルの成立と語りの構造』一書で、「倒叙探偵小説」の欠点を次のように述べている。

推理小説の特色が推理そのものの過程にあることを考えるならば、あらかじめ読者に犯人の側の周到な犯罪計画を提示しておき、読者にどこか欠陥はないかどうか検討させて、しかる後におもむろに探偵が登場して推理を進めていくやり方は、確かに読者との推理競争の効果を高めることはあるだろう。しかし反面「犯人は誰か」という大きな興味の要素を最初から放棄することになるのだから、よほどの技巧を凝らさないかぎり、推理小説としての興味は半減するといっても過言ではない⁹。

前田の説明があるように、「倒叙探偵小説」の特色は犯人の心理描写と犯罪計画にあり、「犯人は誰か」という謎解きの部分はポイントではないため、必然的

⁹ 注4 前掲書参照、p.124。

にそのサスペンス性は薄れていく。それでは乱歩はどのように「倒叙探偵小説」の特色を発揮すると同時にこの弱点を克服しているのか。また、「倒叙探偵小説」において探偵が犯人を発見し、事件を解明する場面を描く時に、乱歩がプロットの配置についてどう考えているのか。この小節では「屋根裏の散歩者」のストーリーとプロットの分析を通して「倒叙探偵小説」の構成について論じたいと思う。

まず、「屋根裏の散歩者」のストーリーとプロットの整理を以下の表(一)と表(二)にまとめておく。

表(一)「屋根裏の散歩者」のストーリー

※筆者作成

ストーリー
(ア) 主人公の郷田三郎は飽き性で、都会で頻繁に居所を替える人である。彼は明智小五郎と知り合いになって、「犯罪」に興味を覚え、犯罪に関する書物を読み耽ける。
(イ) 手に入れた犯罪に関する書物を読み、郷田三郎は犯罪の真似事を始めた。しかし三ヶ月が経つと、飽きてしまう。
(ウ) 郷田は東栄館へ移り、そこの住人と知り合った。
(エ) 同宿者の北村と遠藤ら三人でカフェで酒やコーヒーを飲み、下宿に戻ると、遠藤はモルヒネという毒薬を見せてくれた。この時点から、郷田は遠藤のことを嫌いになった。
(オ) 郷田は自分の部屋の押入れを通った屋根裏からほかの止宿人の秘密を覗き見る。
(カ) ある日、郷田は遠藤の部屋の上にある大きな穴に気付いた。その節穴を利用して、遠藤を殺す方法を思い付いた。
(キ) 郷田は遠藤が所持している毒薬を盗み出し、遠藤を殺すチャンスを待つ。
(ク) ある夜、郷田は遠藤を殺害した。
(ケ) 遠藤の死因が自殺と判定された二日後、郷田は安心し、仕事の成就に満足した。
(コ) 遠藤が死んでから三日目、明智小五郎が郷田を訪ねてきた。明智は遠藤の死因を調べ、そして不審な点を郷田に告げて東栄館を去った。
(サ) 明智は遠藤が自殺ではなく他殺、そしてその犯人が郷田ではないかと疑

う。その犯罪手法を調べるため、明智は郷田の押し入れに入り、そして東栄館の屋根裏に潜ってみた。

(シ) 明智が東栄館へ調査に来てから半月後、郷田はすっかり安心し、気楽な日常生活に戻った。

(ス) ある日、明智は突然に郷田の押し入れから出てきて、郷田の犯行を全部あばいた。そして茫然となった郷田を残して立ち去った。

表(二)「屋根裏の散歩者」のプロット

※筆者作成

プロット

- 【A】主人公の郷田三郎は都会で頻繁に居所を替え、飽き性な性格を持つ人である。彼は明智小五郎と知り合いになって、「犯罪」に興味を覚え、犯罪に関する書物を読み耽ける。(ア)
- 【B】手に入れた犯罪に関する書物を読み、郷田三郎は犯罪の真似事を始めた。しかし三ヶ月後、飽きてしまう。(イ)
- 【C】郷田は東栄館へ移り、新しい住人と知り合った。(ウ)
- 【D】郷田は自分の部屋の押し入れを通った屋根裏からほかの止宿人の秘密を覗き見る。(オ)
- 【E】ある日、郷田は遠藤の部屋の上にある大きな穴に気付いた。その節穴を利用して、遠藤を殺す方法を思い付いた。(カ)
- 【F】郷田は遠藤と知り合った頃のことを思い出した。その時遠藤はモルヒネという毒薬を見せてくれた。郷田はその時点から、遠藤のことを嫌いになった。(エ)
- 【G】郷田は遠藤の毒薬を盗み出し、屋根裏で遠藤を殺すチャンスを待つ。(キ)
- 【H】ある夜、郷田は遠藤を殺した。(ク)
- 【I】遠藤の死因が自殺と判定された二日後、郷田は安心し、仕事の成就に満足した。(ケ)
- 【J】遠藤が死んでから三日目、明智小五郎が郷田を訪ねてきた。明智は遠藤の死因を調べ、そして不審な点を郷田に告げて東栄館を去った。(コ)
- 【K】明智が東栄館へ調査に来てから半月後、郷田はすっかり安心し、気楽な日常生活に戻った。(シ)
- 【L】ある日、明智は突然に郷田の押し入れから出てきて、郷田の犯行を全部

あばいた。そして明智は自分が郷田を真似して、屋根裏の中で止宿人と郷田のことを覗き見したことを郷田に知らせた後、立ち去った。(サ) (ス)

以上の表(二)「屋根裏の散歩者」のプロットの配列を見ると、プロット【A】から【I】までは犯人郷田の側から彼の心理動機と犯罪計画の描写、そしてプロット【J】から【L】までは探偵役の明智の登場と事件を解明する場面の描写である。このような配列の構成は「倒叙探偵小説」の特徴であり、つまり最初から犯人の心理やトリック、犯罪動機を詳しく描き、そして最後には探偵が機智を働かせてそのトリックを見破っていく構成である。「屋根裏の散歩者」の内容を考えると、本作品が「倒叙探偵小説」であることは明白である。

そして以上の表(一)と表(二)を対照的に見ると、「屋根裏の散歩者」のストーリーとプロットの配列は二箇所を除いてほぼ一致している。まず最初の箇所であるが、ストーリー(エ)の部分はプロットにおいては【E】の内容に当り、そしてこの部分には、物語全体の展開に影響する重要なポイントが三つ含まれている。一つ目は被害者遠藤の登場、二つ目は郷田が遠藤を嫌いになった理由、そして三つ目は遠藤を殺害する時に使った薬品モルヒネの描写である。つまり、この部分は殺人の構成要件である被害者、加害者、動機と犯行に使う道具が描写されている。

もちろん、この時点では郷田はまだ屋根裏に上っていないので、郷田がどのようにモルヒネを使って遠藤を殺害するか、読者はまだ知らない。しかしもし時間順にプロットが配列されているのであれば、ストーリー順通りに、郷田が遠藤の部屋の節穴を発見したあたりから、彼がモルヒネを使って遠藤を殺害するだろうと読者は容易に連想できる。そのために、乱歩はプロット【F】(ストーリー(エ)の部分)で出た情報を回想という形で【E】の後に配置し、サスペンス性を強くしたのである。

また、プロットの順では、郷田は遠藤を嫌っているものの、遠藤の部屋の穴を発見するまで、彼を殺そうと考えたことはなかった。つまり郷田は節穴を発見してから、突然に遠藤を殺害できることに気付いた。そして人殺しの可能性に気付いてから、郷田は遠藤を嫌う理由を後付けのように思い出したのである。この配列から見れば、郷田の遠藤に対する殺意は、遠藤の性格を嫌っているからというよりも、偶然に遠藤の部屋の上にある節穴を発見し、心に殺意が芽生えたため、というべきだろう。

次に、もう一つ異なる部分はプロット【L】の描写であるが、この部分にはストーリー（サ）と（ス）のパートが含まれている。探偵役の明智小五郎はストーリー（コ）の段階で、すでに郷田が犯人だろうと推測した。しかし彼は半月後、郷田が外出から自室に戻った時に、突然に郷田の押し入れから現れて郷田を驚かせた。明智がどのように犯行をあばくのか、その過程の描写は「探偵小説」家の腕の見せ所となるが、以上の分析から見ると、プロット【L】の展開は明智の唐突な出現により、物語の結末に意外性をもたらす結果になる。「探偵小説」の三要素¹⁰を定義する乱歩にとって、このような結末の意外性は不可欠な構成なのである。

「倒叙探偵小説」の特色は犯罪者の心理描写と探偵役の事件解決の過程にあるため、犯人を当てるようなミステリー性は一般の「探偵小説」ほど重要視されていない。しかしプロットとストーリーの整理をまとめた表（一）（二）を見ると、「倒叙探偵小説」の最も重要な要素である、「犯人の心理描写」「犯罪動機」「犯行の過程」「探偵による事件解決」などが「屋根裏の散歩者」の中核をなしていることがわかる。そして「倒叙探偵小説」の最大の特徴である犯人の心理描写もこのようなプロットの配列を通してさらに浮き彫りにされている。結末部における探偵役の登場と、犯行をあばく場面の按配も「結末の意外性」という点から見ればとても効果的と言えよう。

3. 語り手と焦点化の分析

「屋根裏の散歩者」は三人称の語り手を取り、郷田三郎の背景と心理を説明している。そして三人称の語り手の位置と焦点は物語世界の外側だけでなく、時には物語世界の内側にいる郷田三郎の視点から物語世界を眺めて、彼の心境を代弁している。

「屋根裏の散歩者」は物語世界の外側から物語を語っているので大部分の描写は「外的焦点化」に属しているが、郷田三郎の目を通して物語世界を眺めて語っている「内的焦点化」場面も多い。そして焦点人物はほとんど郷田が中心である（焦点化については本論 pp.26-27 参照）。

「屋根裏の散歩者」は三人称の語り手であるが、犯人の郷田三郎を焦点化人物としており、そして外的焦点化から内的焦点化に転化する場面がいくつかあ

¹⁰ 乱歩は「探偵小説」の面白さの条件として、「出発点に於ける不思議性」、「中道に於けるサスペンス」、「結末の意外性」の三つの要素を挙げている。詳しくは本論 p.21 参照。

る。外的焦点化から内的焦点化へ移行するような場面はどのような内容であり、またどのような効果をもたらしているのか、これらの点を明らかにするために、まず「屋根裏の散歩者」の内的焦点化の場合を以下の表（三）のように整理しておく。

表（三）「屋根裏の散歩者」の内的焦点化の場合（焦点人物：郷田三郎）

※筆者作成

物語の内容	場面説明
A 初めて押し入れに入ってから、遠藤の部屋を発見するまでの過程	
[1] さてそこへ寝て見ますと、予期以上に感じがいいのです。（中略）そこから、自分自身の部屋を、泥棒が他人の部屋をでも覗く様な気持で、色々の激情的な場面を想像しながら、眺めるのも、興味がありました。（pp.504-505）	押し入れに入った郷田の目に映る部屋の眺めと彼の感想
[2] それは丁度朝の事で、屋根の上にはもう陽が照りつけていると見え、方々の隙間から沢山の細い光線がまるで大小無数の探照燈を照してでもいる様に、屋根裏の空洞へさし込んでいて、そこは存外明るいのです。（中略）それ丈けでも随分雄大な景色ですが、その上、天井を支える為に、梁から無数の細い棒が下っていて、それが、まるで鍾乳洞の内部を見る様な感じを起させます。「これは素敵だ」一応屋根裏を見廻してから、三郎は思わずそう呟くのでした。（pp.506-507）	屋根裏に上がって、状況を確認する郷田
[3] この舞台でならば、あの当時試みたそれよりも、もっともっと刺戟の強い、「犯罪の真似事」が出来ると相違ない。（p.509）	屋根裏にはじめて上がった時の感想
[4] どうしてまあ、こんな手近な所に、こんな面白い興味があるのを、今日まで気附かないでいたのでしょうか。（p.509）	屋根裏の魅力に気付く郷田
[5] それに、平常、横から同じ水平線で見ると違って、真上から見下すのですから、この、目の角度の相違によっ	屋根裏からほかの同宿人を覗き見し

<p>て、あたり前の座敷が、随分異様な景色に感じられます。(中略)五角六角と、複雑した関係が、手に取る様に見えるばかりか、競争者達の誰れも知らない、本人の真意が、局外者の「屋根裏の散歩者」に丈け、ハッキリと分かるではありませんか。(pp.510-512)</p>	<p>た時の感想</p>
<p>[6]径二寸ばかりの雲形をして、糸よりも細い光線が洩れているのです。(中略)そして、肥厚性鼻炎でもあるのか、始終鼻を詰らせ、その大きな口をポカンと開けて呼吸をしているのです。寝ていて、鼾をかくのも、やっぱり鼻の病気のせいなのでしょう。(pp.513-514)</p>	<p>寝ている遠藤を屋根裏から覗き見た時の感想</p>
<p>B 郷田が毒薬を手に入れてから遠藤を殺すまでの過程</p>	
<p>[7]——三郎が彼を嫌い出したのは、その晩からです——その時、遠藤は、真赤に充血した唇をペロペロと嘗め廻しながら、さも得意らしくこんなことを云うのでした。(中略)そして、彼の惚気話は、更らに長々と、止めどもなく続いたことですが、三郎は今、その時の毒薬のことを、計らずも思い出したのです。(pp.517-518)</p>	<p>遠藤を嫌いになり、そして毒薬の存在を思い出す場面</p>
<p>[8]先ず薬を盗み出す必要がありました。(中略)いや、そうまで考えなくても熟睡中の遠藤に、薬の落ちて来た方角などが、分るものではありません。(pp.518-520)</p>	<p>遠藤殺害の可能性を思案する郷田</p>
<p>[9]話の間に、屢々それとなく、殺意をほのめかして、相手を怖がらせてやりたいという、危険極る欲望が起って来るのを、彼はやつのことで喰止めました。「近い内に、ちつとも証拠の残らない様な方法で、お前を殺してやるのだぞ。(中略)今の内、せいぜい喋り溜めて置くがいいよ」(p.521)</p>	<p>郷田の心に潜んでいる殺意の描写</p>
<p>[10]そして、窓には隙間なくカーテンを引き、入口の戸には締りをして置いて机の前に坐ると、胸を躍らせながら、懐中から可愛らしい茶色の瓶を取り出して、さてつくづく眺めるのでした。MORPHINUM HYDROCHLORICUM(o.g.) (p.522)</p>	<p>郷田が見た毒薬のレットル</p>

<p>[11]ともすれば、彼の目の前に浮んで来るのは、暗闇の洞窟の中で、沸々と泡立ち煮える毒薬の鍋を見つめて、ニタリニタリと笑っている、あの古の物語の、恐ろしい妖婆の姿でした。(p.523)</p>	<p>郷田が毒薬を調合する時の妄想</p>
<p>[12]MURDER CANNOT BE HID LONG, A MAN'S SON MAY, BUT AT THE LENGTH TRUTH WILL OUT.誰かの引用で覚えていた、あのシェークスピアの不気味な文句が、目もくらめく様な光を放って、彼の脳髓に焼きつくのです。(中略) 一体お前は、自分自身の心を空恐しくは思わないのか。(p.524)</p>	<p>郷田が殺人をためらう描写</p>
<p>[13]「ウフフフ……………」突然三郎は、おかしくて堪らない様に、併し寝静ったあたりに気を兼ねながら、笑いだしたのです。「馬鹿野郎。お前は何とよく出来た道化役者だ！(中略) あの遠藤の大きく開いた口が、一度例の節穴の真下にあったからといって、その次にも同じ様にそこにあるということが、どうして分るのだ。いや寧ろ、そんなことは先ずあり得ないではないか」(pp.524-525)</p>	<p>殺人計画の盲点に気付いた郷田の心理描写</p>
<p>[14]それは兎も角、彼はこの発見によって、一方では甚しく失望しましたがけれど、同時に他の一方では、不思議な気安さを感じるのです。「お蔭で俺はもう、恐しい殺人罪を犯さなくても済むのだ。ヤレヤレ助かった」(p.525)</p>	<p>殺人計画の盲点に気付いて殺人を一度あきらめた郷田の心理描写</p>
<p>[15]彼はすぐ様目を閉じて了ったのです。「気がついたか、きっと気がついた。きっと気がついた。そして、今にも、おお、今にも、どんな大声で叫び出すことだろう」彼は若し両手があいていたら、耳をも塞ぎ度い程に思いました。(p.527)</p>	<p>郷田が遠藤を殺した時の気持ち</p>
<p>[16]すると、遠藤は、口をムニャムニャさせ、両手で唇を擦る様な格好をして、丁度それが終った所なのでしょう。(中略) 彼は遂に、所謂「仏」になって了ったのでしょう。(pp.527-528)</p>	<p>遠藤の死を見届けた郷田</p>

<p>[17]「ナアンダ。人殺しなんてこんなあっけないものか」 三郎は何だかガッカリしてしまいました。想像の世界では、もうこの上もない魅力であった殺人という事が、やってみれば、外の日常茶飯事と、何の変りもないのでした。この鹽梅なら、まだ何人だって殺せるぞ。(p.529)</p>	<p>人の命を奪ったことが想像するほど刺激的でないと感じる郷田</p>
<p>[18]妙に首筋の所がゾクゾクして、ふと耳をすますと、どこかで、ゆっくりゆっくり自分の名を呼び続けている様な気さえます。(中略)じっと見ていますと、その環の背後から、遠藤の異様に大きな唇が、ヒョイと出て来そうにも思われるのです。(p.529)</p>	<p>遠藤を殺して気が抜けた郷田の心が得体のしれない恐怖に襲われた描写</p>
<p>[19]「愈々これで済んだ」頭も身体も、妙に痺れて、何かしら物忘れでもしている様な、不安な気持ちを、強いて引立てる様にして、彼は押入れの中で着物を着始めました。(p.530)</p>	<p>不安が残る郷田</p>
<p>[20]その時、どんな態度をとったらいいのでしょうか。ひよっとしたら、後になって疑われる様な、妙な挙動があつては大変です。そこで彼は、その間外出しているのが一番安全だと考えたのですが、併し、朝飯もたべないで外出するのは、一層変ではないでしょうか。「アア、そうだけ、何をうっかりしているのだ」(p.531)</p>	<p>疑われて犯行がばれてしまうのではないかと不安になる郷田</p>
<p>[21]「どんなものだ。流石は俺だな。見る、誰一人ここに、同じ下宿屋の一間に、恐ろしい殺人犯人がいることを気附かないではないか」彼は、この調子では、世間にどれ位隠れた処罰されない犯罪があるか、知れたものではないかと思うのでした。(中略)その実は、巧妙にやりさえすれば、どんな犯罪だって、永久に現れないで済んで行くのだ。(p.533)</p>	<p>誰にも気付かれなない犯罪を完遂したと考える郷田</p>
<p>[22]どうだ、流石の名探偵もこればかりは分るまいと、心の中で嘲りながら、三郎はこんなことまで云って見るのでした。(p.535)</p>	<p>明智を嘲け笑う郷田</p>
<p>[23]その時、廊下を先頭になって歩きながら三郎はふと妙</p>	<p>得意げになった郷</p>

<p>な感じにうたれたことです。「犯人自身が、探偵をその殺人の現場へ案内するなんて、古往今来ないこったろうな」ニヤニヤと笑い相になるのを、彼はやっとの事で堪えました。(p.535)</p>	<p>田</p>
<p>[24]「ヤレヤレ、これで愈々大団円か」そこで三郎は、遂に気を許す様になりました。(pp.539-540)</p>	<p>探偵の明智でも自分の犯行に気付くまいと考える郷田</p>

表（三）を見ると、三人称でありながら郷田の目を通して語る内的焦点化の場面が実に多い。以上の表（三）は大まかに A、B 二つの情況に分けられる。まず例 A の[1]から[6]までの、内的焦点化の描写は、郷田がはじめて押し入れや屋根裏に入った時と、遠藤の部屋を覗き見した描写場面である。普通、読者は三人称の語り手よりも、一人称の語り手と共鳴しやすい。そして内的焦点化の場合において読者は作中人物を通して、さまざまな情報を獲得するので、その効果は一人称による語りと似ている。郷田が押し入れと屋根裏から覗き見る場面では、郷田の目線から物語るという内的焦点化がなされ、暗闇が広がる空間から外の世界を覗き見するという異常な視覚描写がより一層際立たせられているのではないかと思う。

そして例 B の[7]から[24]までの描写を見ていくと、まず例[7]は毒薬の提示、例[8]は殺人手法の実行の可能性、例[9]は殺意の描写である。これらの部分は主に郷田が毒薬のことを思い出し、遠藤殺害の可能性を考えながら心の殺意を抑えきれなくなった描写である。そして例[10]は毒薬の瓶のレッテルである。この部分は郷田の目を通して、彼が毒薬の瓶を眺めている様子が語られる。内的焦点化により、読者がより郷田に感情移入しやすくなるための変換と言えよう。そして例[11]は郷田の妄想についての描写であるが、この部分は郷田が毒薬を調合する時の、高揚した気持ちが描かれている。

また例[12]から例[14]までは郷田が殺人をためらう気持の描写で、例[15]は郷田が遠藤を殺した時の感情表現が描かれている。次の例[16]は郷田が遠藤の死を見届けた過程の描写である。この例[16]の部分は縦の視線を使い、上から下へと縦の視線が描かれ、人間の死を見る。乱歩は山場の一つとなるこの場面で内的焦点化を使い、異常な視覚感覚を表現している。そして最後の例[17]から例[24]までは殺人者になった郷田の一喜一憂の心理変化についての描写である。

以上の例 B の部分をまとめてみると、例[10] 毒薬の瓶のレッテルと例[16] 郷田が遠藤の死を観察する過程の描写以外、一人の殺人犯の、目標の決定から毒薬の製造、計画の実行及び殺人した後までの心理変化が生き生きと描写されているのである。そしてこれらの心理描写は内的焦点化になり、読者は作品を読みながら犯人の異常心理に寒気を感じるのだろう。また例[10]の描き方も上述のような効果があり、読者は内的焦点化により郷田の視線を通して毒薬を眺めていると言えよう。

本論 p.63 で述べたが、乱歩は『幻影城』で「倒叙探偵小説」としての「殺意」に高く評価し、特に主人公である犯人の心理描写について次のように好評している。

前半の恋愛の場面は左程に思わなかったが、犯罪計画に入ってから、息苦しいばかりに読ませられた。この息苦しさ、サスペンスとスリルは、同種類の作品中でも稀有の力強さを持っている。これでもかこれでもかと犯人の一喜一憂を反覆叙述する心理描写は少々くどい程で、十二分に堪能させられる¹¹。

「殺意」を「倒叙探偵小説」の傑作と評価する乱歩が「倒叙探偵小説」を創作する際に、多少なりともこの作品から啓発された所であろう。以上の評論に言及された「殺意」における犯人の一喜一憂の詳しい心理描写は本作品にも見られる。特に内的焦点化の描写場面には犯人郷田の心理が多く語られている。このように「殺意」は犯人の心理描写に重点が置かれている作品であるが、この点について前田彰一は『欧米探偵小説のナラトロジー ジャンルの成立と語りの構造』一書で次のように述べている。

彼（筆者注：「殺意」の主人公）は、殺人は芸術たり得る、ただ誰にでもできるというものではなく、殺人が芸術であるのは超人の場合にかぎるのだ、という優越感に満ちた確信を抱く。こうして「芸術としての殺人」という考えに酔う主人公の心理的高揚感が、主人公の側に密着して細密に内面描写されることによって、この作品は通常の探偵小説的な枠組みを越え

¹¹ 注 1 前掲書参照、p.52。

て読者を異様なサスペンス的状况に引き寄せる¹²。

以上の引用を見ると、「殺意」の主人公は「殺人が芸術」と考えるほどの異常心理者であり、そして主人公である犯人の心理描写を通して、読者に異様なサスペンス性を伝えている。「屋根裏の散歩者」の場合は、内的焦点化の描写を通して生き生きと犯人郷田の異常心理を描き、そして郷田の一喜一憂の心理変化を詳細に語っている。また「殺意」と同じ、犯人の心理描写を通して異様なサスペンス性を醸し出すのに成功していると言えよう。

縷々述べてきたが、「倒叙探偵小説」の最大の特徴は犯人の心理描写にある。乱歩はこのような内外焦点化の変換を通して犯人の心理を鮮やかに描いている。また普通の人と考えにくい視覚描写も内的焦点化により一人称小説のような効果を生み出している。このような焦点化の変化からも、乱歩の優れた「倒叙探偵小説」を創造しようとする工夫が見られる。

おわりに

この一節では、「屋根裏の散歩者」における構造分析を中心に、「倒叙探偵小説」の定義、ストーリーとプロット、そして語り手と焦点化について論じてみた。上述の分析をまとめると、以下ようになる。

まず、乱歩は『幻影城』において「遙かに文学的に優れた形¹³」として高く評価した作品「殺意」を例として取り上げ、「倒叙探偵小説」の定義について説明している。最初に犯人の心理とその周到な犯罪計画、そして最後に探偵の登場と推理の過程などが丁寧に描かれている。またプロットの配列も効果的であり、犯人郷田の異常心理がさらに鮮明に語られている。終盤における明智小五郎の唐突な登場場面も意外性があり、乱歩自身の定義した「探偵小説」三要素の「結末の意外性」を存分に表現したと言える。

そして内外焦点化の変換により、読者は押し入れと屋根裏という暗闇の空間で、水平と縦の視線を通して、外の世界を覗き見るという変質的視覚性を体験させられている。それに内的焦点化の描写も成功し、三人称の語りでありながら、一人称のような効果を醸し出している。

「倒叙探偵小説」の最大の特徴は謎解きの面白さよりも犯人の心理描写にあ

¹² 注 4 前掲書参照、p.136。

¹³ 注 1 前掲書参照、p.55。

り、「屋根裏の散歩者」において、乱歩は内外焦点化の変換を通して犯人の心理変化を描写している。そして屋根裏から毒薬を垂して被害者を殺害するやり方も奇抜な方法でかつ興味深いトリックと言えよう。

